撮影・安齊重男

鈴木正治「八甲田山」（沼宮内産御影石、2002年）

アートの森 ⑬

県内美術館コレクションから

作家の痕跡を未来に

青森公立大学国際芸術センター青森学芸員

慶野　結香

本作は、国際芸術センター青森（ACAC）で2002年春に行われたアーティスト・イン・レジデンスで制作された。鈴木はACACで「その自由な精神と一日中、休むことなく作品制作に没頭する姿は、滞在した多くのアーティストから尊敬を受け愛されていた」と、浜田剛爾（ACAC初代館長）も書き残している。青森市内で鈴木の作品と出会うたびに、生前の鈴木を知る人々と話をするたびに、確かにその自由さと、生きることとものを作ることの分かち難さを識り、さまざまな愛を感じている気がする。

この「八甲田山」の石は、岩手・沼宮内産の御影石本来の形を生かしてできている。沼宮内は、鈴木が「第2回岩手町石彫シンポジウム」（1974年）に感銘を受け、石彫制作への意欲をかき立てられた場所。ACACでの制作の様子を知る人によれば、石が運ばれてきて、最初に降ろしたままの位置で制作を行い、その後動かさなかったということだが、生前の鈴木と親交があり、彼の伝記も著した工藤正義は「晩秋の夕陽が、鈴木さんの石彫の真ん中に沈んで行くのを、偶然にも目にしたことがある。もしかしたら、鈴木さんはそれを意識して、設置場所を選択したのだろうか？」と言う。

石の上部には八甲田山、裏には馬に乗るゴディバが線描彫刻されている。ゴディバ夫人は、11世紀アングロサクソンの領主レオフリック伯爵の妻であったが、夫が公共事業のため民衆に重税を課すことに異を唱え、芸術で心を豊かにする時間がとれるよう訴えた。その訴えを通すため裸で馬に乗った伝説が生まれたのだった。鈴木はこの話にひどく感動し、ゴディバをモチーフとするようになったという。鈴木の芸術観が透けてみえてくるようだ。

作品の収集と保管を目的の一つとする美術館に比べれば、滞在制作を主な活動とするACACにはコレクションと呼べるものはない。しかし、それぞれの表現者がここで何を考え、どのような活動を行い、どんな出来事が起こったかという記録を発信してきた。それは一種のコレクションでもある。この野外彫刻も、鈴木がここにいた痕跡であり、その記憶を未来に伝えるものとしてある。